第４回高知県子ども読書活動推進協議会議事録

日時：平成 26 年 2 月 19 日（水）13:30～15:30
場所：高知共済会館　２階中会議室「藤」

１.開会
　高知県子ども読書活動推進協議会副委員長挨拶

２.議事
（１）協議
「第二次高知県子ども読書活動推進計画」における平成 25 年度の取組の検証
～取組の成果及び課題、改訂等について～

【説明】第３章　Ⅰ．子どもを自主的な読書活動へいざなうために
１．家庭における子どもの読書活動の推進について
【質疑・応答】
(委員)
　生活リズムチェックカードの実施状況は、平成 25 年度の人数 12,763 人（H24 年度 10268 人）になっており、評価できるが、これは、母数の何パーセントくらいになるのか。
(事務局)
　平成 24 年度の小学生、中学生、幼保園児の総数は 74,012 人、実施率 13.9%。平成 25 年度は総数 72,542 人、実施率 17.6%（12 月現在）である。この実施人数は県にチェックカードの認定証発行の依頼があった人数である。各学校や市町村独自でチェックカードを作成して取り組んでいる事例も見聞きしており、実際にはもっと高いのではないかと考えている。
(事務局)
　子どもが本と出会う場づくりについて、関心の高い市町村が増え、平成 25 年度ブックスタート事業等の実施率が 94.1%（32 市町村）になった。未実施の 2 町においても実施に向けて検討されており、年度別実施計画の平成 26 年度目標実施率を 100%と改定する。
　しかし、全対象者が健診に参加できていない。乳幼児健診に来られない方への対応や図書館・図書室の利用及び家庭での読書活動につなげる取組の実施を市町村に働きかけていく。
　今後も継続して高知県で生まれる全ての乳幼児と保護者に絵本を通した親子のふれあいの大切さを伝えていく。
(委員)
　実施率が上がったことは評価できる。また、家に絵本があることは素晴らしいことである。ブックスタート事業とは、本好きな子どもを育てるためでなく、親子のコミュニケーションツールの一環として始まった取組である。絵本の素晴らしさを伝えることも大切だが、働きかけの方法を研究していく必要がある。実施率が 100%となっても市町村によって取り組み方が違う。モデルケースを市町村に伝えていくことが大切である。

【説明】２．地域における子どもの読書活動の推進について
【質疑・応答】
(委員)
　県立図書館の児童図書の直接貸出冊数の増加に向けて、成果として『質の高い図書』の選定等とあるが、その根拠は何か。
(事務局)
　県立図書館の子ども読書室の選書の方針として、質の高い本を揃えるということがある。質の高い本の根拠としては、読み物の場合には、作家の評価を調べる。また、作品については漢字や言葉の難易度、ストーリー

構成が子どもに分かりやすいかどうかということを調べる。そして、子どもの心の成長に素直に資するものになっているか見ている。

絵本は、画家が描いている場合が多いので、その絵そのものの芸術性はあるのか。また、ストーリーの展開と絵が連動しているか。読み聞かせなどに使いやすいかというのもポイントになっている。

読み物や絵本以外の様々な主題を扱った本は、調べ学習などにも使われることから、扱われるデータや情報が正確か、出典が明記されているか確認している。目次や索引が調べ学習の時などに使える構成になっているか。文章しかないと調べる時に子どもが使えない。そういうことをチェックしている。

(委員)

誰もが利用できる図書館の整備について、韓国語・中国語の絵本 95 冊は、その要求度は高いのか。また、英語の絵本はあるのか。

(事務局)

外国語の本についてはニーズが増えている。新図書館には多文化コーナーを計画し、多文化サービスを展開する予定である。多文化サービスとは、2、3年ぐらい前から全国の公立図書館で取り組みが始まったもので、外国人住民のために図書館サービスを行うだけでなく、本を通じて文化的背景が異なる様々な人々の相互の交流や相互理解を深め、地域文化そのものを豊かなものにするというサービスである。外国語が読める人だけでなく、日本語の分かる人のために日本語の訳がついている本もある。それらを併せて提供するという形で行う予定である。

(委員)

「おはなし会」はどこでどのくらいなされているのか。また、何名くらいが参加しているのか。

(事務局)

「おはなし会」については１２の図書館で定期的に行われている。それ以外の図書館でも、年に1回のイベントとして開催する場合はある。参加人数は把握できていない。

(委員)

野市の図書館では、図書館の司書と読書ボランティアが連携して、おはなし会を月に2回、水曜日に0歳から 3 歳ぐらいのお子さんを対象に行っている。絵本に親しむということと子育てについての悩み相談といった意味合いを持っている。子どもたちは、おばあちゃんの家に帰って来たという感覚で来てくれている。絵本を小さい時に読んだから本を好きになるとかいうことではなくて、その世界の中で心を養うことになっているのではないかと感じている。５組ぐらいのときもあれば1組の時もある。毎回楽しみに来てくれている。地域の中の図書館という意味で、図書館とそのボランティアが連携して、一体化し行っていくところに何か一つの意義があると思っている。

(委員)

本当に孤立しがちな母親と赤ちゃんが来て、交流ができ、子育て支援にもなっている。５組とか、何組も来るという訳ではないが、それぐらいの方がお話ができる人数だと思う。

(委員)

県内の子ども文庫の存続状況（減少傾向だとは思うが）はどのような感じか。また、子ども文庫などには県立図書館などが本のまとめ貸しなどを行っているとあるが、その他の支援、また地域の小さな文庫を存続させるための施策といったものはあるのか。

(事務局)

高知県の文庫連絡会があり、名簿では現在 13 ぐらいが登録している。活動休止状態のところが多く、活動しているのは 4 つである（全国読書推進協議会調査）。減った要因は担い手の高齢化である。全国的に 70 年代、80 年代のような活発さはない状態である。

(委員)

4 つですか。存続が危ぶまれるところもあるのか。

(事務局)

基本的には、担っていく人（後継者）がいないということである。

(委員)
2、3年前、都会に出ていた団塊の世代が地域に戻り、地域に新規参入された方もあるとニュースで見た。そういう方は絵本を持っている。学校もそうだが、地域で子どもたちが気軽に足を運べる地域文庫や家庭文庫、子ども文庫等にその方々が新規参入できるような仕掛けができないものか。民間活力といった分野で、小さな文庫を守っていく展開ができないか。これは県立図書館の範疇なのか。
(事務局)
県立図書館は、団体貸出という形で、貸出をしている。文庫もあれば学校、読書会等もある。資料はある程度揃えているが、全体フォローするとなると足りない。
(委員)
文庫同士の横のつながりはあるのか。
(事務局)
連絡は取り合っている。文庫連絡会もある。
(委員)
行政支援という面では、県立図書館からの貸出ぐらいのものなのか。
(事務局)
今、文庫を開いている方はベテランである。アドバイスをすることもあるが、県立図書館の職員が指導を受けることもある。
(委員)
昔は文庫が各地域にあったのだが、後継者がいないことで、寂れている感じである。

【説明】３．学校等における子どもの読書活動の推進について
【質疑・応答】
(委員)
ことばの力育成プロジェクト推進事業の指定校21校は報告書をまとめるか。また、学校図書館の組織的、計画的な活用の促進について、実施率が伸びていない。何に課題があり、手だてをどう考えているのか。
(事務局)
学校図書館の組織的、計画的な活用の推進については、ことばの力育成プロジェクト推進事業の指定校21校を中心に、学校図書館を活用した授業が広がりつつあると捉えている。指標数値では、伸びてないと捉えられるが、この数値は週及び月に数回程度、学校図書館を活用した授業を実施した割合である。学期や年に何回か実施した割合は高いものがある。学校図書館を活用した授業を実施していない学校は、平成24年度、小学校は10.9%だったのが、平成25年度5.1%に減り、中学校でも18.4%だったのが7.3%と、共に半減をしている。徐々に学校図書館を活用した授業は増えていると捉えている。
事務局としては、より計画的な実施を促すため、小中学校の学校図書館の担当教諭を対象としたパワーアップ講座の中で、学校図書館を活用した授業の指導案を持参してもらい、それをもとに演習や協議などを行った。また、講話の中で事例を紹介し啓発も行った。さらに、指定校21校の報告書をHPにアップし、計画的な活動の推進に、各校が役立ててもらえるように紹介する。
(委員)
読書ボランティアの参加と活性化について、中学校で読書ボランティアの活用率が低いのはなぜか。
(事務局)
小学校と中学校では活用率に大きな違いが見られる。その要因として、発達段階の違いがあるのではないかと捉えている。小学校では以前から読み聞かせが定着し、ボランティアの活用場面も多い。中学校では、自分で本を読むという読書タイムが多く見られる。ボランティア活用の場面が少ないのではないか。しかし、中学校でのボランティアによる読み聞かせの実践も報告はされている。また、読み聞かせ以外に図書の整理等をボランティアが行っている事例も聞いている。ボランティアは来てないが、中学生がボランティアになり小学校や保育所に行っているという事例も聞いており、そういったところで小学校と中学校では、差が出てくるので

はないかと考えている。
(事務局)
中学校での読書は生徒の自主的な活動を大切にしており、読み聞かせボランティアの活用が少ない一因ではないかと考えている。
読書ボランティア養成講座の参加者の感想に、中高生への読み聞かせの要望、中高生への読み聞かせ講座の手法を知りたいとあった。今後は中高生を対象とする読み聞かせ手法の講座内容も取り入れることを検討する。
(委員)
のいち子ども図書館クラブも中学校へ行っている。国語の教科で何を学習しているのかを聞き、読み聞かせを授業に活かしていけるように一緒に選書するなど担任や国語の担当と打ち合わせをしている。
小学校の場合は、「この年代はこれがいいのでは」と、ボランティアが考え、読んでいるが、中学校で授業時間を割いて実施するときには、実施後の成果を考えている。
(委員)
高等学校課における読書活動の推進について、研究指定校の報告書がまとめられるとのことだが、拝見することは可能か。また、研究成果としてどのようなものがあるか。
(事務局)
研究報告書を見ることは可能である。単年の研究指定であるが３年計画で取組んでいる。平成 26 年度が３年目であり、研究成果を十分普及できると考えている。研究内容としては、読書へのアニマシオンを活用した指導、進学指導等への活用、図書利用数に結びついた取組や校内組織の整備等がある。
(委員)
県立高校における学校図書館管理システムについて、導入方法（契約方法、決定権者)、システム内容（メーカー、バージョン、使用方式)、導入費用及び年間の維持費用等を知りたい。
(事務局)
図書館管理システムを導入している県立高校は、34 校中 23 校である。岡山情報処理センターによる探調 TOOL というもので、県として統一的なものを導入されるよう昨年度から順次、10 校ずつ導入している。１台当たりが 15 万円程度で、競争見積もりの形式を取っている。高等学校課で決定している。ソフトの使い方は、自館方式。パソコン内での活用で、共有性は今のところない。将来的には県立高校間でのネットワークの構築を考えている。維持費用として、ヘルプデスク契約等が必要になる。全ての本の登録には時間がかかるが、平成 26 年度は残りの学校に導入予定である。
(委員)
コストの面では、ハードが１台 15 万円、それ以外に維持費用等年間のコストがかかるということか。
(事務局)
はい。
(委員)
今は、様々なシステムが出ている。南高校の統合理由の一つに津波対策が挙がっている。津波のことを考えるとクラウド方式が有効である。個人情報等の危惧もあるが、生徒の情報を番号にするなど個人の特定ができないシステムもあり、コストも下がっている。県下的に統一するとのことだが、拡張性も大事であり、研究していく必要があると思われる。公立図書館も同様である。
小中学校では、どのような状況か。導入状況やデータ等はないのか。
(事務局)
市町村で導入を検討し、選択されている。市町村の課題の優先順位で、システム化の前に読書活動の推進に取り組む市町村が多い。大月町や南国市がシステムを導入し、活用し始めている。
(事務局)
平成 26 年度は、データベース化に関する国の調査がある予定になっている。
(委員)
高知市は全校で導入されているのか。

（事務局）
　まだである。10 年前から 15 校が続いている。
（委員）
　導入率は高いのか。
（事務局）
　高くはない。61 校中の 15 校である。
（委員）
　校長会では、学校単独で導入したいという話題も出るが、止めている状態である。導入されていないと不便さを感じている。
（事務局）
　データはないが、実感として極めて高知県は整備が遅れていると感じる。大月町のように学校が統合し、集中運用できるのであれば、投資も可能だろうが、高知市の現状を見ると厳しいのではないか。
（委員）
　統合に合わせるのがチャンスではないか。
（事務局）
　働きかけはしているが、事例が少ない。高知市には期待している。
（委員）
　図書館で授業をする時に、デジタル教科書やデジタル黒板は有意義である。電子機器が揃っていると授業がスムーズにできる。１校に１台は欲しい。
（委員）
　システムの良さというのは、公立図書館員も感じている。清水中学校は統合に合わせ、バーコードは買ったが、システム導入には至っていない。市町村教育委員会がすすめることであるが、市町村への情報提供等お願いしたい。
（事務局）
　データを揃え、システム導入への支援できるような県の体制を作るべきである。今は、図書館にクーラーを設置できるように、補助金（２分の１）を出している現状である。もう少しダイナミックな施策が必要かもしれない。

【説明】Ⅱ．子どもの読書活動を支える環境を整備するために
　　１．公立図書館等の機能の充実について
【質疑・応答】
（委員）
　市町村立図書館等への支援の充実に関して、基本的な児童書は市町村でも揃えるように、市町村立図書館等に継続して働きかけるとあるが、予算措置、経費の確保はできるのか。
（事務局）
　県立図書館ができることは、県立図書館の蔵書を長期で貸し出すしかない。補助金等はない。
（事務局）
　市町村立図書館等への司書及び支援員等の配置充実に係る具体的な取組の『子どもの読書活動支援員の配置』の文言を「緊急雇用創出臨時特例基金等」から「学校図書館読書環境設備費補助金等」に改定する。これは、緊急雇用創出臨時特例基金の補助金が廃止されることからである。
　子どもの読書活動支援員の配置については、平成 26 年度も市町村独自での継続配置を促していく。
（委員）
　支援員の配置はどのくらいの人数が可能か。
（事務局）
　これまでの経緯を踏まえ、各市町村が実情に応じて配置するため、県が支援員の配置可能な人数を算出する

ことはできない。
　市町村への調査結果では、26 年度の配置希望は、教育版地域アクションプランを活用して、11 町村で 16 名、学校図書館読書環境設備費補助金活用して、28 市町村 141 名の配置希望が挙がっている。
(委員)
　改定案のとおりでよろしいか。
(委員)
　はい。

【説明】２．学校図書館等の機能の充実について
【質疑・応答】
(委員)
　学校図書館等図書標準達成校数の拡大に向け、好事例の紹介し啓発を図ったとあるが、具体的な数値、どのような好事例があるか。また、学校図書館図書標準の達成率に数値が入っていないのはなぜか。中学校の数値が低迷している要因や、全体の数字を全国平均並みに増やすための具体的な方策はあるか。
(事務局)
　この数値は、国が行う『学校図書館の現状に関する調査』から挙げている。この調査は２年に１回の調査であり、平成 25 年度は調査がない。事務局としては 100%にしたいと思うが、国からの地方財政措置をどれだけ図書の購入に使うかは市町村の判断になり、把握できていない。したがって、目標値も挙げていない。平成 22 年度、24 年度の状況を見ると、小学校は増えており、全国平均よりも高い。中学校は全国平均よりも低く、減っている状況にある。全国平均並みに増やすための具体的な方策としては、平成 22 年度に『きっとある　キミの心にひびく本」という推薦図書リストブックを各校に配布し、同時に、掲載している本の購入を目的に予算を構え、各校に大量の図書を購入してもらった。新しく本が入ることで、古い本を廃棄した学校（特に中学校）が多くあり、この数値になっている。
　しかし、平成 22 年度から 24 年度にかけて廃棄処分はあったが、８割以上、「ほぼ標準を達している」という中学校は増えており、徐々に改善方向に向かっているのではないかと分析をしている。正確な数値は平成 26 年度の調査結果を見なければ分からない。
　好事例の紹介は、小中学校の教員や学校図書支援員を対象のパワーアップ講座の中で行ってきた。文部科学省の平成 25 年度子どもの読書活動優秀実践校に選ばれた潮江中学校や大方中学校の実践（図書の廃棄の仕方、図書のレイアウト、調べ学習の部屋を設置等）やことばの力育成プロジェクト指定校の中から、いの中学校の生徒のアイデアを活かした学校図書館づくり、土佐町小学校の子どもたちを図書館に呼び込むために図書館内外の掲示の工夫等を具体的に紹介した。指定校以外でも「きっとある　キミの心にひびく本」のコーナーを作っているごめん野田小学校の事例も紹介した。また、県外からも先進的な取組をしている学校から講師を招聘し、様々な取組についての紹介もしていただいた。
　学校図書館のデータベース化の推進についてと同様に、引き続き市町村教育委員会に働きかけをしていく。
(委員)
　12 学級以上のすべての小中学校に配置した司書教諭は、専属なのか担任等との兼任なのか。司書教諭の実態として教員と連携するために打ち合わせをする時間的ゆとりがないということがある。この点は把握しているか。
(事務局)
　配置している司書教諭のうち、ことばの力育成プロジェクト推進事業の指定校 21 校は専任である。その他の学校は担任との兼任という形である。パワーアップ講座等で学校図書館担当者から、司書教諭の実態として、教科の担任であり、学級担任と連携するための打ち合わせの時間がないと聞いた。しかし、多くの受講者が県外の先進校の講師の方からアイデアを紹介されたこともあり、講座を受けて、時間がない中でも連携していきたいという前向きな捉えをしていた。
(委員)

小中学生の読書活動に係る指数の「読書が好き」、「全校一斉読書率」は高いが、「平日の読書時間」、「休日や休み時間の読書時間」、「学校図書館を活用した授業に実施率」が低い理由は何か。

(事務局)

平日の読書時間については、家では読書習慣がついていない。地域の図書館が身近にない。学校で借りた図書は学校の読書の時間に読むために学校に置いてある子どもも多いのではないか。部活や習い事で帰りが遅くなり、自宅で宿題を先にするのが精一杯という現状があるのではないかと考えている。

休日や休み時間等での図書館の活用の低さについては、学校によっては学級文庫が充実している学校もある。その本を読んでいるケースもある。また、授業に関する本や授業の中で借りた本を読んでいるということがある。休み時間や放課後も学習をし、それから部活や習い事等で読書する時間がとれない。平日は学校図書館が開いていない。また地域の図書館が身近にない等が考えられる。

この現状から、学校で読書の機会を設けることは大事になってくる。学校図書館を活用した授業の計画的な実施という点で、まだ子どもたちの読書が好きという面を活かした授業が十分できていない実態があり、『ことばの力育成プロジェクト推進事業』を通して、学校改善を図る。

(事務局)

学校図書館等の活用については、市町村訪問の際に、数値を示し実態を伝えている。学校図書館と公立図書館等との連携を促し、家庭や学校での読書時間の増加、図書館を活用した授業の継続的な実施については強く促している。

数字的に伸びてないのは、まだまだ、生徒の読書活動が自主的、自発的なものになっていないということ。また、地域の図書館、図書室、学校図書館が子どもたちの身近な本に親しむ場所になっていないということが原因であるということも伝えてきた。公立図書館、図書室のない地域もあり、学校図書館の充実を市町村にお願いしている。

平成 25 年度、市町村の読書環境の現状と課題から今後の取組を読書関係者等で協議し、連携、協働した読書活動を推進していくための基盤を醸成する目的で、『子ども読書活動協働推進のための熟議』という研修会を開催した。その中で、子どもたちにとって、最も身近な学校図書館の活性化についても促した。

(委員)

学校図書館を充実させることが、子どもの学力にどのような影響を与えるのか、実証することが大事ではないか。新聞活用にしても、図書館の充実にしても、本の与える教育力という観点からも、先生方には「確かに子どもたちに力がつく」と実感はあると思う。実感だけではなく、客観的なデータに基づいて「図書館を活用した授業を展開すれば、これだけの力がつきます」と実証しなくてはいけない。「実感」から「実証」だと思う。『ことばの力育成プロジェクト』の３年指定が終了した時に、「３年間取組んで、学校図書館を利用し、新聞を活用したことで、国語のこの領域はこんなに伸びた」ということを具体的に学校現場から県民に対して示してほしい。

そうすることが、市町村教委、あるいは市町村の図書に対する意識を変えることにつながり、保護者に対しても家庭での読書、新聞の購読にもつながると思う。具体的かつ客観的なデータに基づく実証をぜひ県の方にはお願いしたい。

(委員)

私もある学校のそれまで読み聞かせを実施していなかった５年生に読み聞かせに行ったことがある。２月の終わり頃から朝の読書の時間に読み聞かせさせてもらった。担任の先生と校長先生は心配していたが、子どもたちは集中して聞いてくれた。普段の授業では落ち着きがなく、手足が動いている子どもたちが全く動かず集中していた。先生方にも新たな発見になったようだ。５、６年になったらもう自分で読まさないといけないと決める必要はない。まだ読んでもらいたいものだ。読み聞かせの楽しさを味わいたいと思っている。

６年生になったその子どもたちは、「先生、雨が降って外へ遊びに行けんき、低学年に読み聞かせに行きたい」と言い、図書室で本を借りてきて行ったそうだ。子どもは６年生でも「楽しいな」と思うとそれを伝えたいと思う。こういった活動が自発的な読書活動につながるのではないか。

ただ読み聞かせをしたら本が好きになるものではない。子どもには本の中に受けとめたいと思うものがあり、

キャッチできると、そこから考え方が変わっていく。先生方にはそのタイミングを見逃さずにいてほしい。
　中学生への読み聞かせもしたが、20 分間集中して聞いてくれた。中学生にも集中して落ち着いた雰囲気で聞ける時間を補償するということも大事だと感じた。
　保育所へは保育士として務めたことがあるが、読み聞かせをしていると、子どもたちがけがをしなくなる。外へ出る前に、５分でも 10 分でも読み聞かせをする。すると子どもたちに落ち着きが出てくる。こういった事例を投げかけていくといいのではないか。
(委員)
　数値として伸びているものもあり、また心の面への影響もある。それが学力にも関わってくると思う。そういったことが分かるアンケートや調査が必要ではないかと思う。

【説明】３．子どもの読書活動推進のための人材育成について
【質疑・応答】
(委員)
　教職員の研修について、読み聞かせや音読等は学んできているが、百科事典を活用した学習や図鑑や資料データベースを使った学習が、得意という先生が少ないのではないかと思う。調べ学習の方法等を研修の中に入れるのはどうか。
　子どもたちは 10 年前に比べ大きく変わってきている。先生方はどう接したらいいか、どういう本を与えたらいいか学ぶ必要がある。目次と索引のない本を見ても何も思わない先生もいる。子どもたちに調べ学習をさせる時には目次と索引がある本を与えてほしい。
　ポプラディア（百科事典）は、どの学校にもあるが、先生用にインターネットで月 500 円（通常 800 円）で提供されている。教室ですぐに調べることができるシステムである。NIE などで調べて難しい言葉があれば、すぐに絵も写真もカラーで出るなど、子どもにも面白いし興味も湧くと思う。こういったものや使い方を子どもたちに伝えるための講座等を増やしてほしい。
(委員)
　読書ボランティア養成講座の案内が９月だった。９月にはもう既に他の講座が入っている。４月当初に知らせていただけると年間の活動計画の中へ入れられる。今後も実施するなら早めに講座の日を知らせてほしい。
(事務局)
　分かった。なるべく早くお知らせする。

【説明】Ⅲ．子どもの読書活動を総合的に推進するためについて
【質疑・応答】
(委員)
　市町村の子ども読書活動推進計画については、策定に向け市町村に働きかけをしているということだが、市町村は計画の中にいろんな分野のことをたくさんやろうと計画する。学校図書は学校図書館担当職員の配置がポイントだと思う。学校司書が学校図書館を切り盛りし、司書教諭に渡して司書教諭が子どもと授業をつなぐ。そして、子どもと本をつなぐというサイクルが大事だと思う。連携ということが言われているが、連携のためには小中学校に学校司書がいることが大事。既に策定している市町村にもこれからのところにも促してほしい。自分も発信していく。この協議会としてもこれを提言できるかどうかにかかっていると思う。学校司書の配置が重点ポイントだということを地教委に強く啓発していく必要がある。
(委員)
　賛成である。
(委員)
　私も賛成である。読書ボランティアをして子どもたちが学校生活を生き生きと過ごしていないと意味がないと思う。
　学校図書館は子どもたちが「行ってみたい」と思う図書室にならなくてはいけない。そこには人が必要であ

る。図書室の改修は容易ではない。学校の職員だけでも難しい面がある。地域図書館の職員が一緒になって改修したという事例もある。

先生方だけでなく、図書館職員、そして、子どもと保護者が一緒になって図書室を作り上げることが子どもの読書活動につながっていくと思う。ＰＴＡを動かし、地域ぐるみで取り組んでいくべきだと思う。

３.閉会

高知県教育委員会事務局生涯学習課長挨拶